

むかし、あるところに、心のやさしい娘がいました。

あるとき、娘は、川のそばで、蛇が蟹を飲みこもうとしているのを見つけました。娘は蛇に、

「おまえ、そんなかわいそうなことをするな。生きているものが、お互に、食うたり食われたりするのはいけない。放してやれ。わたしがおまえの嫁さんになつてやるから」といいました。

蛇は蟹を放して、すうっと行つてしましました。娘は、「ああ、よかつた」と思つて、家に帰りました。

それからしばらく経つた満月の晩のこと。娘の家の戸をたたく者がありました。父親が出てみると、こうこうと照る月明かりの中に、このあたりでは見かけない美しい若者が立っていました。若者は、

「ごめんください。お宅に、娘さんがおるはずだが」といいました。

「ああ、娘はいるが何の用だ」と父親がたずねると、若者はいいました。

「このあいだ、わたしが、川のそばで、蟹をつかまえて食おうかと思つていたら、娘さんが、『嫁になつてやるから蟹を放してやれ』といったので、放してやつたのだ。約束どおり娘さんをもらいに來た」

父親はおどろいて、

「なんとしたことだ。娘と相談して返事をするから、今日のところは帰つてくれ」といいました。若者は、

「それなら、つぎの満月の晩にまた来よう」といつて、帰つて行きました。

父親は、あわてて娘に、

「おまえ、いつたいどうしたことだ」と、わけを聞きました。娘は、

「このあいだ、川のそばで、蛇が蟹を飲もうとしていたから、『嫁になつてやるから蟹を放してやれ』といったんです。すると、蛇は蟹をぶつと放してどこかへ行きました。まさかうちに来ようとは思わなかつた」といいました。

ふたりが、どうしたものかと思案に暮れているうちに、ひと月たつて、つぎの満月の晩がやって来ました。娘は、父親にいいました。

「おとうさん。約束をしたんだから、わたしは蛇の嫁になります。今晚蛇が来たら、一週間待つてくれるようになってください。そして、お父さんは、その一週間のあいだに、ひのき造りの一間四方の祠ほ(い)じを建ててください。わたしは、その祠の中に入つて、蛇が迎えに来るのを待ちます」

真夜中、だれかが家の戸をたたきました。父親が出てみると、このあいだの若者が立っていました。若者は、返事をきかせてくれといいました。父親は、「わかった。娘を嫁にやろう。だが、一週間待つてくれ。新しい家を建てて、花嫁衣装を着せて娘を待たせておくから、一週間したら迎えに来てくれ」といいました。

若者は満足そうに帰つて行きました。

つぎの日から父親は、大工を頼んで、ひのきの祠を建てはじめました。

一週間たつて、祠ができると、父親は、家宝の観音さまを娘に渡し、

「おまえのお守りに、持つていて」といいました。

晩になると、娘は美しい衣装を着て、観音さまを持って、ひのきの祠に入りました。そして、戸をきつちり閉めて、お経を唱えて観音さまをおがんでいました。

真夜中になると、祠が、メシ、メシ、メシメシと音をたてはじめました。蛇が、祠を七巻半もとりまいて、しめつけていたのです。音はどんどん大きくなつていき、祠は」われそうでした。娘は、ひたすらお経を唱え続けました。

しばらくすると、どこからか、ガザ、ガザ、ガザガザという音が聞こえ始めました。すると、しめつける音が少し小さくなりました。ガザガザという音はだんだん大きくなり、しめつける音はどんどん小さくなつていきました。しまいに、メシメシという音はしなくなり、ガザガザという音だけが聞こえました。娘は一心にお経を唱え続けました。しばらくすると、ガザガザという音もぴたりとやみました。

やがて、夜が明けたので、娘は恐る恐る外へ出てみました。祠のまわりには、たくさんの蟹が死んでいて、大きなヘビが蟹に食い殺されていました。

娘は、祠に観音さまをまつって尼あまになり、蟹の供養くようをしたということです。

今は、その祠は、蟹満寺とよばれています。

おしまい

再話
..
村上郁